

2019年4月入職

えんどうまい
遠藤万依

傾聴を通して、ひとの気持ちに寄り添うこと

患者さまとの他愛もない会話に、喜びがある

農業を営む家庭に生まれた私は、幼少期から農機具に触れて育ちました。高校生の頃は農機具系の会社で働こうと考えていたのですが、オープンキャンパスに参加し、臨床工学技士という職の存在を知ったことが転機になりました。田舎町で育ったこともあり、幼い頃からお年寄りの方と関わるが多く、人との触れ合いにも楽しさを感じていたのです。機械に興味があり、人と関わるのが好きな私にとって、両方を満たしている臨床工学技士の仕事は自分自身を活かせる職業としてベストだと思いました。

今はどちらかと言うと、人と関わることを楽しんでいるかもしれません。患者さまと話が盛り上がっているときにやりがいを感じる人が多いのです。実家から定期的に野菜が送られてくるので、料理の話になることもよくあります。じゃがいもがたくさん送られてきた話をする、「今日の夕飯はじゃがいもを使ってみようかな」と返してくださったり、後日「この前はこんな料理を作ってみたよ」と報告してくださったりと、患者さまと他愛もない話をできることに喜びを感じています。

「傾聴」のスキルアップがもたらす奥深さ



思いやりエキスパートの研修を通して上達したと感じるのが、傾聴の技術です。相手の本心に近づく手法を学んだことで、重たい話を患者さまから打ち明けていただくケースが増えています。つい最近も治療で苦しい思いをしていらっしゃる患者さまからお話をお聴きしたところ、後日「気持ちが楽になった」と仰っていただけました。自分としてはただ頷いて話を聴くだけで、何かよい言葉をかけられなかったと反省していたのですが、そのときに傾聴だけでも患者

さまのお気持ちを受け止められることを実感しました。

傾聴の技術は今後も引き続き磨き、技術的なスキルアップやトラブル対応など、総合的に成長していきたいと思っています。私には憧れる先輩がいて、その方とは同じタイミングで同じクリニックに配属され、異動のタイミングも同じだったのですが、クリニックを去る日に普段は泣かない患者さまが涙をこぼされました。先輩がいなくなることが本当に寂しかったそうです。改めて先輩を尊敬するとともに、同じ期間クリニックにいたにもかかわらず、そこまで患者さまから慕われていないであろう自分に不甲斐なさも感じました。そのような悔しい経験が、思いやりエキスパートに立候補することへの意欲を駆り立てたのかもしれません。今は、勇気を振り絞って思いやりエキスパートに立候補してよかったと思っています。



すべての人に寄り添い、
いつでも安心と快適を
提供できる技士になります。

遠藤 万依